トロンボーン奏者 村田陽一さんに聞く

聞き手 川島 葵さん●フリーアナウンサー

むらた・よういち
静岡県出身、立正大学卒。洗足学園音楽大学ジャズコース講師。中学1年でトロンボーンを始め、大学在学中にプロ活動を開始、'91にはファーストアルバムをリリース。演奏活動だけではなく、作曲・編曲やプロデュースなど、幅広い分野で活躍中。

ラジオから流れてきたジャズっぽいトロンボーン。

川島 本日は、トロンボーン奏者の村田陽一さんにお話をうかがいます。

村田さんのプロフィールを拝見すると、トロンボーンだけではなく、作曲や編曲もなさって、さらに音楽プロデューサー、そして音楽大学のジャズコースの講師ということで、本当に多くの肩書きをお持ちですね。トロンボーンをお始めになったときから、こうしたいろいろなお仕事をしたいと考えていらっしゃったのですか。

村田 いえ、結果的にこういうなりわいになってしまったのです。

中学1年の後期に、友人に誘われて吹奏楽部に入部しました。それまで、音楽を聴くのは好きでしたが、演奏するほうは全く未経験。トロンボーンは腕を伸ばしたり縮めたりして演奏するので、リーチがあったほうがいいということから、比較的背が高

かった私にトロンボーンがあてがわれたのです。

同級生が私よりも上手に吹くので、負けたくないと一生懸命に練習しました。若いから伸び代が大きく、どんどん上達して楽しくなってしまって、中学3年の頃にはトロンボーン奏者になりたいと漠然と考えていました。

さらに、地元である静岡の市民オーケストラに高校1年の時から参加させていただくなど、比較的早い時期から大人の社会に入っていった気がします。高校時代には全日本ユース吹奏楽団のオーディションに合格し、米国やメキシコに演奏旅行に行ったこともありました。

高校まではクラシックの演奏家になろうと思っていて、NHK交響楽団の首席奏者になりたいなどと考えていました。ドイツ留学から帰国した若い先生にレッスンをしていただくなど、クラシック音楽を3年間しっかりと勉強し、それがあとになって相当役立ちました。

高校3年の時にたまたまラジオを聴いていたら、クラシックとは全く異なる、非常にポップでちょっとジャズっぽいトロンボーンの演奏が流れてきたのです。クラシック音楽ではトロンボーンがメロディーを演奏することはほとんどありませんが、ラジオで聴いた曲ではメロディーを吹いていて、すごく格好いいと思ったんです。

ちょうどその頃、浜松でラジオのジャズ番組の公開放送があると聞いて行ってみました。そこで向井滋春さんのトロンボーン演奏を聴いて感激し、「あなたみたいになりたいが、どうしたらいいか」と聞いたのです。向井さんは同志社大学を卒業なさっていますが、ジャズをやりたいんだったら東京の大学に進学して、音楽のサークル活動をしたりいろいろな人と知り合ったほうがいいとアドバイスをいただき、それをうのみにしてしまって（笑）。

自分に向き合いながら荒川の河川敷で練習した2年間。

川島　念願かなって東京の大学に進学。立正大学経済学部に入学なさいました。

村田　当時、経済学部は1・2年次が埼玉の熊谷キャンパス、3・4年次が東京の品川キャンパスでした。入学して2年間は東京ではなく埼玉だったわけですが、それが私にとってとてもプラスになったと思います。荒川という大きな川が近くにあり、その河川敷でいつでも思う存分にトロンボーンの練習ができました。東京で人間関係を広げる前に、2年間自分に向き合って練習し、基礎力を高めることができたのです。

3年生になって都心のキャンパスに通う頃には、ほかの大学からたくさん声を掛けていただくようになりました。ジャズのビッグバンドのサークルがコンテストに出るので、サポートしてほしいというわけです。そこで、プロを目指す多くの人との出会い

村田 陽一さん

がありました。例えば、サルサのバンドとして有名なオルケスタ・デラ・ルスの、私は結成時のメンバーでした。いろいろな方と知り合って、いまも一緒に演奏活動をしている人がいるなど、実にうまい具合に物事が進んでいった時期でした。

高校を卒業して東京に出てきたとき、頼れる人が誰もいない独りぼっちの状態でしたが、いまでは人脈が業界一広いといわれることさえあります。私が心掛けているのは、伝えるべきことはどんな相手にもきちんと伝える。内容を自分で咀嚼し、相手に理解してもらえるような言葉で説明するということ。優れた人は難しい内容を小学生でも分かるように説明できるものですが、相手の理解力を考えながら話せるようになるには、日常的に人と接する頻度が多いことや、一人で考える時間も必要です。孤独を味わうことは大事ですね。

川島　村田さんは、大学1・2年の時に一人の時間をたっぷりと経験なさったわけですね。

村田　ええ。私はいま、一人でライブコンサートを開くことがあります。それは音楽家として究極の姿であって、一人で演奏し、感動を与えるには、自分の思いを伝えるすべを知っていなくてはできません。

結果的に、絶対に通るべき道を図らずも通ってきた。

川島　村田さんのお話をうかがっていると、将来、トロンボーンのプレーヤーやプロデュースの仕事をするためには何が必要で、そこから逆算していま何をすべきかを俯瞰して見ていらっしゃったような気がします。

村田　そうですね。自分の現状を見ると、結果的に、絶対に通るべき道を図らずも通ってきたと感じます。

私は小さい頃から音楽の専門教育を受けたわけではなく、トロンボーンしか吹けず、音楽の理論なんて全く分からない状態で、高校の時に社会人のオーケストラに参加しました。入ったものの、トロンボーンの出番が少ないため、練習中はずっとスコア（全てのパートが書かれた楽譜）を見ていました。また、フレンチホルンの楽譜を読んで、キーが全く異なるトロンボーンにトランスレートして吹いたこともあります。こうした経験が、後々役に立ったのです。

その後、東京に出てきてジャズのソリストになろうと思い、他人の横で吹いていてもしかたがないので自分のバンドを作りました。ジャズのバンドはフロントにサックスやトランペットがいることが多いのですが、ボーカルのように私が一人で前に出て

演奏するスタイルにしたかった。しかし、参考になるものが何もないので、自分で作曲や編曲をする。さらに演奏する曲の順番すなわち演出を考え、メンバーとして誰が適しているか考えて、自分で依頼するといったことを続けているうちに、そういった仕事の依頼もいただくようになりました。

逆に、自分が自信のないジャンルについては、そこに特化したライブを企画し、それを乗り越えることによって自信を付けたりしました。

川島　自分がやらざるを得ない状況を、わざと作るのですね。

村田　私は探究心は旺盛でポジティブ思考なので、不得手なものはアップデートすればいいと考えながらやっているうちに身に付いてしまった感じです。

トロンボーンはトランペットやサックスよりもポップスにおけるシェアが明らかに低く、トロンボーンだけでは生活できないからアレンジもと考える若い人がいますが、私は違うと思います。そうやって逃げ道をたくさん作るのではなく、まずトロンボーンを死ぬほどやってみてほしい。そこまでいっていない人が多いのは、少し残念に感じます。

川島　全部、中途半端になっているように見えるのでしょうか。

村田　一つの道を究めている人が、非常に少ないのではないでしょうか。一緒に仕事をしている同世代の人たちと話すと、40歳以下で突出した人が見当たらないという話題になります。得られる情報量が多いために、自分で考え、検証する能力が低くなっているのではないか。また、道具が便利になったためにスキルが落ちているのではないかという気がします。

川島　それは日本だけですか。それとも、世界中の現象なのでしょうか。

村田　特に日本でしょうね。世界は、もっと分母が大きいので。日本は分母が小さいから、すぐにプロになれるという面がありますが、米国などは分母が桁違いに大きいので、クオリティの幅も広いと思います。

いい曲のスコアには絵画的な美しさがあると知った。

川島　作曲や編曲をなさるときは、全ての音を一気に想像して書いていくものでしょうか。それとも、楽器を一つずつ重ねるようにして作っていくのですか。

村田　編曲の場合は、初めから完成形が頭の中で鳴るので、それをただ譜面に移していくだけです。作曲する場合は、あらかじめ自分の中で曲のイメージをしっかり持っ

川島 葵さん

た上で旋律から作っていく場合や、曲の頭から作る場合、サブから作る場合などがあります。旋律も、モチーフを広げていったり、断片をふくらませたり。

川島　作曲や編曲には時間をおかけになりますか。

村田　いいえ、私は筆が速いのです。速すぎて、渡辺貞夫さん（サックス奏者）から、ちゃんと考えたのかと怒られたことがあります。それ以来、ひととおりできたら違うバージョンも何通りか作ってみて、どれがいいか比較検討するようになりました。

川島　最初から頭の中で音が鳴るというのは、すごいですね。高校生のときにオーケストラに入って、スコアを一生懸命にご覧になったことが役立っているのでしょうか。

村田　それはとても勉強になったと思います。いい曲のスコアを遠目で見ると、絵画的な美しさがあるのです。高校生の時に見ていたことから大きい影響を受けていると、あとになって気付きました。

川島　経験したことと全部に意味がある。そこにつながっていくのですね。

　現在、村田さんは音楽大学のジャズコースの教員としては、どんなことを感じていらっしゃいますか。

村田　演奏はもちろんですが、音楽大学に入ったという大きなチャンスをつかんだのだから、社会に出るまでの4年間を最大限に生かしてほしいということです。

　私がミュージシャンになることに、親はずっと反対でした。卒業が近付いて就職の話になると困るので、そうなる前に、当時非常に人気があった米米CLUBやレベッカなどのバンドのコンサートツアーに参加して全国を回っていました。

川島　在学中に、もう仕事を始めていらっしゃったのですね。

村田　ええ、私が頑張っている様子を知って、両親も少しは安心したようです。また、卒論のテーマをミュージックビジネスとして、ツアーに参加した経験を元に書き上げることができました。

川島　孤独な時間が大切というお話がありましたが、特にいまの若い人は孤独を嫌う傾向があります。SNSでいつも他人とつながっていたいし、苦しい時間は減らしたい。そうなると、自分に向き合う時間も限られてしまうのではないでしょうか。

村田　何かを突き詰めようと思ったら孤独になるのは当然であって、一つの分野でトップになるような人は絶対に孤独を感じていると思います。

　良いか悪いか、物事の本質を判断できる人がもっと増えるといいですね。そのセンサーが鈍いと、情緒も豊かではない。本当に楽しかったり本当に怒っている表情の若

い人って、最近はあまり見ないような気がしませんか。

川島　そうかもしれません。

村田　私は、気分がすぐ顔に出るとよく言われるのですが（笑）。

レコードジャケット裏面の隅から隅まで目を通した。

村田　どんな職業でも、仕事ができる人はどこへ行っても大丈夫だと思います。私の世代では、本格的にジャズの勉強をするのなら留学が当たり前という風潮がありましたが、私は結構冷めた感じで見ていました。逆に、ほかの人よりも熱心にやっていたのはリサーチです。

レコードを買ったら、ジャケットの裏面に載っているクレジットは全て目を通す。例えば向井滋春さんを追いかけていたときは、お金がないので貸レコード屋さんへ行って裏面を隅から隅まで見る。さらに、向井さんが参加しているアルバムを片っ端から買ってみると、彼のソロ演奏が1曲でも入っているのは山下達郎さんと吉田美奈子さん、大貫妙子さんのアルバムだということが分かりました。すると今度は山下さんのファンにもなって、のちに山下さんに呼んでいただいて演奏したこともあります。

かつては、米国の一流音楽大学を卒業し、憧れのプレーヤーと一緒に演奏する日を夢見てアルバイトをしながら修業というやり方もありました。しかし私は、自分の好きなことで食べていけない状態を続けるよりも、憧れのプレーヤーを自分で呼べるような立場を目指したほうが早いと考えたのです。まずドメスティックに自分の足場を固めてから、インターナショナルに海外からプレーヤーを呼ぼうと思いました。景気がいい時代でもあったので。

27歳の時にデビューCDを出し、続いてメジャーなレーベルから2枚目をリリースすることができました。アルバム制作における私のコンセプトは、10代の後半からずっと憧れてきた人たちに来ていただいて一緒に演奏すること。演奏がうまくいけば、そこでつながりができます。外国のプレーヤーも呼んで、こちらがビジネス的にきちんと成功していることを認識してもらえれば対応も違うし、次はこちらがオファーをいただくこともあります。

黙っていても気持ちが伝わるのは誰もがリサーチをしているから。

村田　こうして仲良くなった方々と、現在も一緒に仕事をすることが多く、2019年は東京国際フォーラムで開催された「SRP Presents EAST MEETS WEST 2019」という音楽イベントに参加しました。以前、一緒に仕事をしたことがある米国のベーシストであるウィル・リーさんがミュージカルディレクターとなって、出演者は米国と日本から半分ずつ、それぞれがハウスバンドを組んで、さらにゲストが参加するというジョイントコンサートです。日本側のメ

ンバーは私が選び、ゲストは矢野顕子さんや日野皓正さん、渡辺香津美さん、レミオロメンの藤巻亮太さんなどにお願いしました。ウィル・リーさんは私にとって憧れの存在ですが、仕事上は対等の立場です。英語は基本的に敬語をあまり使わないので、私の性分に合っている気がします。

川島　村田さんは、さまざまなお仕事を通じて世界に音楽を届けていらっしゃいます。２０１６年のリオデジャネイロオリンピック閉会式で披露された「東京２０２０　フラッグハンドオーバーセレモニー」では、椎名林檎さんの楽曲の編曲と演奏をなさって、私は「世界よ、これを聴いたか！」という誇らしい気持ちで本当に感動しました。

村田　椎名林檎さんとの出会いは、私にとっても大きいものでした。レコーディングのときにトロンボーン奏者として呼んでいただいていたのですが、彼女自身にとても人間的な魅力があるし、いつか絶対に制作に関わりたいと思っていました。ただし、経験上、そういう気持ちが先に出るとだめなことが多い。黙って待っていて、向こうからオファーが来るとたいていはうまくいくものです。小野リサさんや布袋寅泰さん、渡辺貞夫さんの場合もそうでした。

川島　黙っているのに、その気持ちがなぜ相手に伝わるのでしょうか。

村田　それは、誰もがリサーチをしているからです。４～５年前に、突然、椎名林檎さんから、セルフカバー集を出すからアレンジをしてほしいという話がありました。なぜ私のところに来たのか、あとになって彼女の周囲の人に聞いたところ、いろいろ情報を集め、音源も聞いて納得したからオファーしたとのことでした。

　椎名さんはものすごいプロフェッショナルだし、こちらもプロなので、プロ同士が話をするのは非常に面白い。いま自分が音楽的に本当にやりたいことを、彼女の現場なら１００％出し切れるので、本当にありがたいですね。

周囲の協力がなければ、自分のやりたいことができない。

川島　村田さんのお話をうかがっていると、周りとのコミュニケーションをとても大切にしていらっしゃいますね。

村田　そうですね。どうすれば自分がやりたいことができるかを考えれば、自分が関わる人に対して丁寧になるのが当然ではないでしょうか。周囲の協力がなければ、自分のやりたいことが成立しませんから。

川島　一流の人になればなるほど腰が低いといわれます。

村田　そういう方は、私の周りにも多くいらっしゃいますね。だから、人と接するときは絶対に傲慢にならないようにとか、相手が傷つくようなことは言わないように気を付けています。

川島　先ほどのお話にもありましたが、一度出会った方々と、その後ずっとつながりがあることが多いとか。

村田　ええ。例えば、渡辺貞夫さんとは、ビッグバンドでコンサートをするからバンドを編成してほしいというリクエストをいただいたことがきっかけとなって、家族ぐるみのお付き合いが20年以上続いています。彼の曲を私がアレンジすることもあります。実は高校3年の時に静岡で渡辺さんのコンサートがあり、聴きに行ってサインをいただいたことがあったのです。もちろん、ご本人は覚えていらっしゃいませんが。

また、私は30歳の頃にはプロデュースの仕事をする機会が増えていたのですが、かつて私の転機になった向井滋春さんのレコードがしばらく前から出ていないのに気付いたので、自分でプロデュースをしてニューヨークでレコーディングをしたことがあります。少しは恩返しができたかなと思いました。

村田陽一さん（右）と川島葵さん
（2019年11月29日 アルカディア市ヶ谷にて）

録音した原盤を自分で持ち、CDは直販にした。

村田　大手のレコード会社と20年近く契約していましたが、それが終わってからは、自分のソロアルバムは全て自分がお金を出して制作し、原盤は自分で持っています。その最大のメリットは、権利が全部自分にあるということ。以前制作したアルバムをレコード会社が廃盤にしたり、会社自体がなくなってしまったら、そのアルバムはもう出せなくなってしまうのです。また、CDの流通をお願いしていた大手の会社がつぶれたこともありました。

そこで2年前に、自分でレコーディングして、原盤も自分で持ち、販売も私のところから直販するだけというふうに変えました。注文用のメールアドレスをSNSのヘッダーに入れておいたら、なんと大手のレコード会社の頃よりも売れるのです。私が関わっているジャンルの音楽を聴く人が日本に例えば1万人だとすれば、お金をかけて広告するよりも、その1万人に向けてピンポイントで情報を発信したほうがいいと気が付きました。

注文のメールをいただいたら代金の振込先を知らせて、入金を確認したら、御礼を書いてサインも入れたCDを送ります。今日も1部梱包して持ってきたので、帰りに投函します。

川島　全部お一人でなさっているのですか。

村田　ええ、自分でやっていますよ。いただくメールにはいろいろなことが書いてあって、とても励みになります。

川島　本日は楽しいお話を、ありがとうございました。